

青春えれじい 解放区篇

とよだ もとゆき

出版社に組合ができた。
ところが、加入したアルバイト青年が、突然「解雇」される。
山男、勤労学生、競馬ファン、組織嫌いの文学青年、
新入社員ら、若者たちがともに起ちあがった。
事態は、予想だにしない展開へ——。
1970年代の青春争乱挽歌。

著者◎とよだもとゆき 編集・装幀◎豊田企画制作舎
ホームページ <http://toyodasha.in.cocan.jp>

新刊案内 (2019年11月下旬発売！)

予価◎ 1,820円(本体) 四六判 ペーパーバック 290ページ

版元◎ NextPublishing Authors Press

amazonにて販売

1970年代を代表する歌手・山口百恵が、武道館ステージにマイクを置いて引退したのは、1980年晩秋。街には彼女の「いい日旅立ち」がしきりに流れている頃。

都内のある出版社では、労働組合員たちが職場に1年以上泊まりこんでいた。建設会社に売却されてしまった職場(社屋)を守るためだ。すでに明渡し期限を1年近く過ぎている。

新しく登場した会社側の自称役員らは、組合に対して「火を点けてやる」、「ぶっ潰してやる」などと脅迫を続け、叩き出しを狙っている。いつ突入してくるかわからない。一方、業を煮やした買主は「建物明渡し断行の仮処分」を東京地裁に申請したところだ。

たかだか10名足らずの労働組合の争議に、所轄の警察署だけでなく、本庁公安2課まで登場し、弾圧に動き始めている。

職場に立て籠もっているのは、たまたま同じ職場で出会った仲間すぎない。

いったいどうしてこんな事態を迎えることになったのだろう。

遡ること7年前の1973年、山口百恵がデビューを果たした年。都内の出版社に労働組合が生まれた。

南米の高峰にアタックした山男、新婚で上京し夜間大学に通いながら働き始めた“勤労学生”、競馬ファンの元気男、組織が嫌いな“文学青年”……さまざまな若者たちが、労働条件の改善を求め、結成に参加した。

争乱のきっかけは、倉庫で働き、組合に入ったアルバイト青年の「解雇」だった。「差別」は許せない、と若者たちがともに起ちあがった。しかし、解雇撤回と社員化を求めた闘いは、思いもかけない方向へ。9年に及ぶ攻防の結末は……。

山口百恵、ユーミン、中島みゆき、サザンオールスターズ、寺尾聰、薬師丸ひろ子らがデビューし、彼らの歌が街角を彩っていた1970年代。

この物語は、その時代に青春を賭けて闘うこととなった若者たちの熱情、交歓、苦悩、蹉跎を描いた哀愁のドキュメントである。

同時に、半世紀近くが過ぎた今、争議に関わった(関わらざるをえなかった)すべての人への挽歌でもある。

さらに、若者たちの反抗が世界的に盛りあがった「1968年」に投げられた問いかけへのひとつの応答でもある。なぜなら、「68年」のほんとうの意味は、「神話」化されたわずかな期間(60年代末)にあるのではなく、そのあとに広がる1970年代の散文的な日常の営みの中にこそ見出せるのだから。